No.	号	執筆者等	思い
3	1988年5月号	山内博	だとすれば、私たちの仲間が若い生命を国家に捧げたことは、軍部支配永続という不毛の目的のために捨て駒にされたばかりでなく、現在の経済大国日本の到来を必死に妨害する役目を割り当てられて、血を流したことにもなる。これを思うと、私は鉛を呑んだような重苦しい気持ちになるのである。（機関誌不戦No.3、1988年5月号）
3	1988年5月号	小熊健二	凶器を持った暴漢が妻子に危害を加えようとしたとき、生命をかけて守る。これは当然のことです。私もそうします。しかし、国家間の戦争に、このたとえ話が通用するでしょうか。近代戦に前線も銃後もないことはご存知ですか。国を守る、家族を守る、こんなことは近代戦の惨禍の前には無意味な議論ではないでしょうか。逆に国家が、軍隊が家族を守ってくれなかった例はたくさんあります。（朝日新聞「声」1988.3.26掲載、機関誌不戦No.3、1988年5月号）
3	1988年5月号	山内武夫	私は今二人の元アメリカ軍兵士と4年越しの文通をしています。二人とも44年の昔、中部太平洋のサイパン島で、日本軍守備隊3万2千名を「玉砕」させた米地上部隊所属の、一人は将校、一人は下士官でした。・・・。私自身について言えば、偶然の重なりというかお恵みで生き残り、7月14日、機会を掴んでアメリカ軍に投降しました。（機関誌不戦No.3、1988年5月号）